

農業を通して学ぶこと

文・構成 田中文太郎

研修所では太鼓や唄、踊りなどの稽古に並んで「農業」が生活の一部となっている。春から秋にかけての繁忙期、おおよそ週に二〜三日は農作業にあてられる。さらに研修生達は、稽古日にも早朝や夕方の時間を使って作業にいそむ。夏場、雑草が激しく生い茂る時期などには、日課の十キロを走り終えた後、朝食前に草むしりをすることもある。

特に秋は一年の中で最も忙しい季節と言える。米・柿・芋など、あらゆる農作物が収穫の時期を迎えるからだ。この季節は農作業のために稽古の時間を削る事も珍しくない。

そして秋の終わり、「収穫祭」を研修所は迎える。ここで研修生達は、日頃お世話になっている地元の方々に、その年採れた作物を振る舞い、学んできた太鼓や踊り、茶道などを披露する。

研修所の農業は完全有機・無農薬で営まれる。大型機械・農薬・化学肥料を用いる現代農業に比べてそれは、困難で、ある意味非効率な道である。研修所の農業により自給される食料は、残念ながら年間消費量の半分程なのだ。（ちなみに研修生の人数は一・二年合わせて毎年十五〜二十人位。研修所が現在借りている田んぼは約三反歩。今年の米の収穫量は三〇キロ袋で四二袋半、約一・三トン。）

だが、効率ばかりを追求しては見えなくなる大事なことがある。次項で紹介するのは、研修所の農業の「現場」に最も深く関わっている鼓童スタッフの、ひとつの思いである。



収穫祭2002で振る舞われた手作り料理・お菓子の数々。ここに挙げた品々の素材となったのは全て研修生が育てた農作物。調理も全て研修生が行った。